

●ベニイロクチキムシタケ (*Cordyceps roseostromata*)



キマワリなどのゴミムシダマシ科の甲虫類の幼虫に寄生する完全型の冬虫夏草の一種で、朽ち木の内部に潜んでいる幼虫に感染し、外部へ子実体を伸ばす「朽木生型」に分類される。写真の個体では、倒木上に溜まった泥の層の上部に繁茂した苔の間から子実体が伸びていた。

●クリーニング後のベニイロクチキムシタケ



付着していた泥や苔を洗い落とすと、体節の明瞭な宿主が現れた。平らな尾部の形状から宿主はキマワリの幼虫であると思われる。尾部から生えた子実体の先端には、半埋生型で突起状子嚢殻が形成されている。ベニイロクチキムシタケの抽出液には抗腫瘍活性があるとの報告もあり、その薬効が注目されている。

●ハナサナギタケ (*Isaria japonica*)



ハナサナギタケは、蛾の蛹や幼虫に感染し、地中の繭から子実体を発生する。薬効成分が多いため、蚕に胞子を感染させて子実体を形成させる人工培養も行われている。写真の個体は、老成したもので、分生子の大部分は既に飛散していた。

●ハナサナギタケ (*Isaria japonica*)



土に埋まった蛾の繭から数多くの柄部が伸び、先端に胞子(分生子)を付けた子実体が形成されていた。この個体も既に老成しており、分生子の大部分を飛散させていた。

●コナサナギタケ (*Isaria farinosa*)



コナサナギタケは、小型の蛾の蛹や幼虫に感染し、地中の繭から子実体を発生する。コナサナギタケの繭を切り取ってみると、菌糸に覆われた蛹が現れた。蛹の側面から子実体が伸び、その先端に粉状の胞子(分生子)が形成されていた。

●コナサナギタケ (*Isaria farinosa*)



マダラマルハヒロズゴガの幼虫は鼓型の蓑を形成し、蓑の内部で蛹まで成長する。上の写真の個体は繭の内部の蛹にコナサナギタケが感染し、子実体を形成したものである。

●セミノハリセンボン(*Isaria takamizusanensis*)



セミノハリセンボンに感染したアブラゼミの体表に虫ピン状の子実体が多く形成されている。目の周辺などの菌糸が食い込みやすい柔らかい組織に多くの子実体が形成されている。今年は雨が多いため、名古屋市内の各所でセミノハリセンボンを見かける。

●ボーマリア菌に寄生されたゾウムシの仲間



ゾウムシの仲間の体表から白い菌糸が発生している。白彊菌と呼ばれる一群で、昆虫の体内から栄養分や水分を奪いながら菌糸を成長させている。近年、生物農薬としての利用が盛んに研究されている。